

H A K A T A

博 多 158

— 博多遺跡群第202次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1338集



遺跡略号 HKT - 202
調査番号 1430

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。

本調査では中世の国際貿易都市として栄えた博多の開発を示す遺構が発見されました。14世紀前半に入江を埋め立て、整地を行った様相をみることができ、さらに、この時期に常滑、奈良、京都、備前、吉備など国内各地から土器が貿易によって活動に搬入されていたことが判明したことは重要です。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで株式会社福博コーポレーションをはじめ関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成26年度に共同住宅建設に伴い、福岡市博多区下川端町158地内で実施した博多遺跡群第202次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業および国庫補助事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、藤野雅基、坂口剛毅が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は、荒牧、淨書は樋口久美子、荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡　　例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は土器、石器、鉄器等に分けて通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をSB、堅穴住居跡をSC、土壙をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。
4. 報文中の輸入陶磁器の説明には『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、土器の説明には山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性 [10] 九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集 1997 の分類・編年を用いた。

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市博多区下川端町 158 における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 25 年 9 月 10 日付で受理した。これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれることから確認調査を同年 10 月 4 日に実施した。確認調査では現地表面下 210cm から 280cm までに遺構面が確認された。この結果から遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。しかし、埋蔵文化財への影響が回避できないことから建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成 26 年 10 月 10 日付で株式会社福博コーポレーションを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託を締結した。続いてこの契約に従い発掘調査を同年 10 月 15 日から 12 月 29 日まで実施し、平成 28 年度、29 年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

平成 26 年度の発掘調査、および 28 年度、29 年度の資料整理、報告を以下の組織体制で行った。

【調査主体】 福岡市教育委員会

(平成 26 年度 発掘調査)

【調査総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄 同課調査第 2 係長 楢本義嗣

【庶務】 埋蔵文化財審査課 管理係長 内山広司 管理係 川村啓子

【事前審査】 埋蔵文化財審査課 事前審査係長 佐藤一郎 主任文化財主事 池田祐司

文化財主事 板倉有大

【調査担当】 埋蔵文化財調査課 主任文化財主事 荒牧宏行

(平成 28 年度、29 年度 整理・報告)

【整理・報告総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財課 課長 常松幹雄 同課調査第 2 係長 加藤隆也

(28 年度)、大塚紀宣(29 年度)

【庶務】 埋蔵文化財課事前審査係長 大塚紀宣(28 年度) 管理係 入江よう子(28 年度)

文化財保護課管理調整係 松尾智仁(29 年度)

【事前審査】 埋蔵文化財審査課 事前審査係長 佐藤一郎(28 年度) 本田浩二郎(29 年度)

主任文化財主事 池田祐司 文化財主事 中尾裕太

【整理・報告担当】 埋蔵文化財課 主任文化財主事 荒牧宏行

II 位置と環境

1. 位置と既往調査成果

博多遺跡群の北東部に位置する。北側の「息の濱」と南側の「博多濱」と呼んでいる浜堤列の間に入り込んだ入江近くに位置する。西側の 89 次調査、南側の 96 次調査では 16 世紀後半以降の近世にかけて湯を埋め立てていった状況が判明した。また、北側の陸化し、都市の形成が早かったと思われる 179 次調査では 13 世紀後半頃より道路遺構が検出されている。

今回の 202 次調査では博多川(那珂川)の流水による河川堆積物の上に 14 世紀前半頃に細かい整地が行われたことが判明した。従って、時期を追って整地、陸化が進行し都市が形成されていった状況が見えてきた。

III 調査の記録

1. 調査の概要

調査区中央から北側にかけては14世紀前半代の細かい整地層が堆積し、その中に土師皿、坏、銅錢が集中して出土した。その整地層を切って同方向の溝と根石を据えた掘立柱建物が検出された。また、南側では掘立柱建物を切る井戸群が検出された。井戸の時期は15、16世紀代に降るものがある。

2. 調査の経過と方法

調査区を大きく東西に2分割し、東側半分を廃土置き場とし西側から調査を開始した。北側は14世紀前半の細かい整地層が堆積し、その土層中で遺構面を設定した部分がある。しかし、後に一連の整地層で時期的にはあまり差が無いことが判った。南端は出入りの階段を設置していた為に最後まで残ったが、井戸とみられる遺構は調査区が狭く完掘できなかった。

3. 基本層序 (Fig.3 ph.3, 4)

調査は試掘成果によってG.L. 2.1m (標高 1.9m) から開始した。この最初の第1面は北側では暗灰色砂質土、中央部では疊混じりの黄灰色粘質土、南東部では土間状の黄灰色粘質土の整地層が堆積していた。南西部では井戸が集中し、その埋土である暗灰色砂質土が整地層を切って検出された。

第2面は下層の遺構面 (第3面)とした標高 1.1 から 1.3m の灰白色砂層までの灰白砂、暗灰色砂質土、焼土、炭の細かい互層の整地層中に設定した。こ



Fig.1 博多遺跡群調査地点図 (1/10,000)

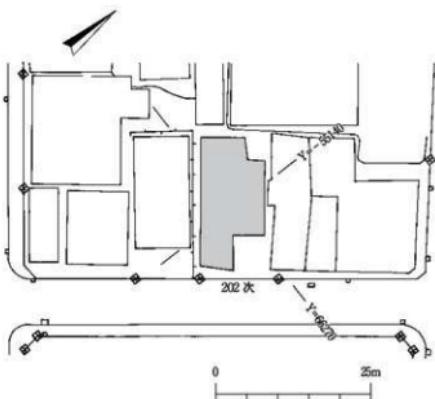


Fig.2 調査範囲図 (1/800)

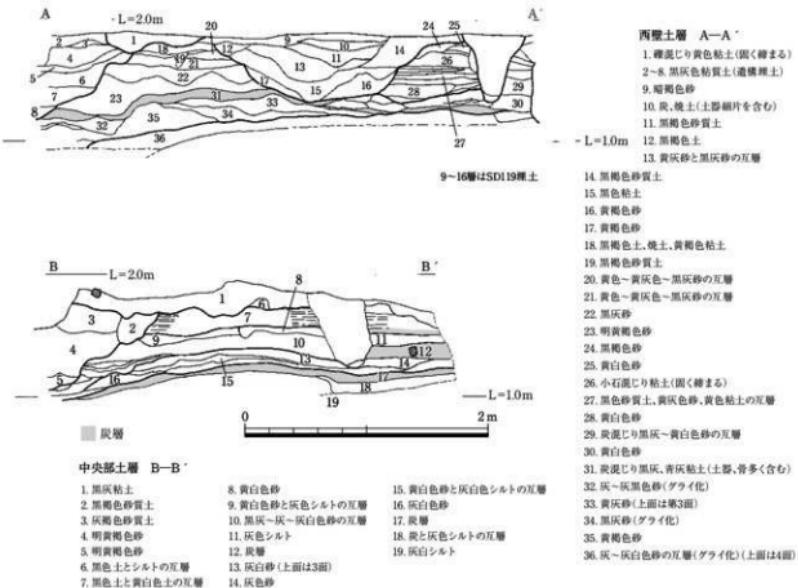


Fig.3 調査区土層図 (1/40)

の互層中に部分的に14世紀前半の土師皿と壺が集中し、また、銅錢も多く出土した。

中央部から南側にかけては第2面の互層の整地層を切った明黄褐色砂(B-B'4層)が検出された。分割した調査のため明確にできなかったが、南東部第1面下の明黄褐色砂に連続しているとみられる。調査終了間際に南東部の明黄色砂を重機によって深掘し、東側から流れ込んだ流路を検出した。(ph.4)この明黄色砂層は約1m堆積し、白磁碗片を含む少量の遺物を含むが明確な時期は不明である。更に下層の標高0m以下ではグライ化した砂とシルトの互層から礫が混じるようになり標高約-1.1mで貝殻片を多く含む暗灰色粘土や青灰色粗砂層に達し湧水する。

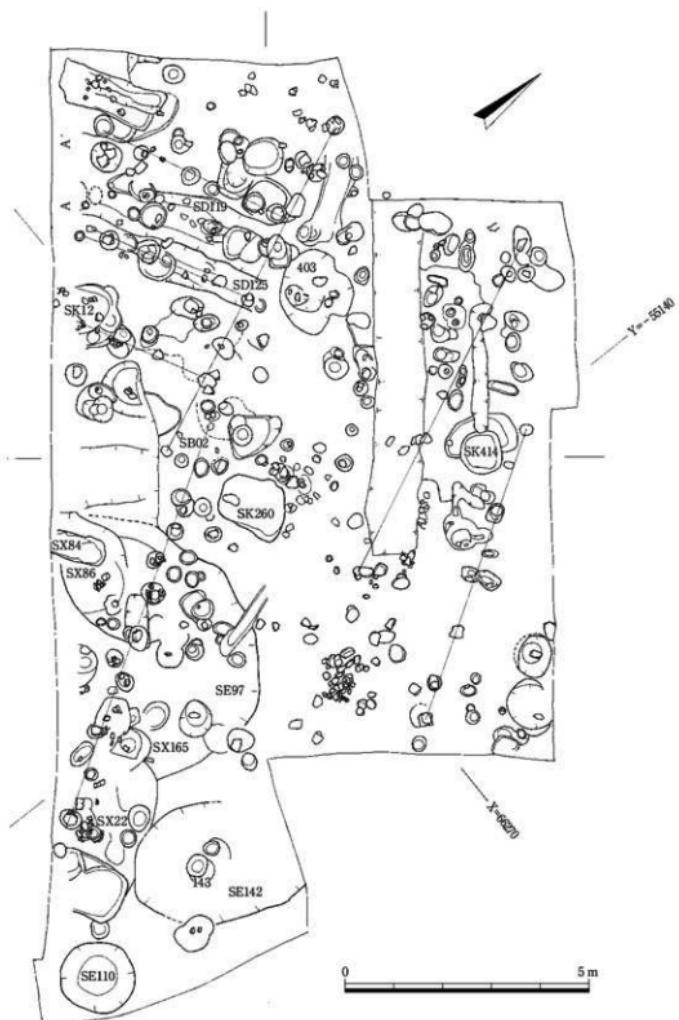


Fig.4 第1面遺構配置図 (1/100)

第3面は北側から中央部にかけて堆積した灰白色ないし黄灰色砂層である。第3面は第2面以下の整地層最下近くの層位である。明色のため整地層を掘りこんだ遺構が明確に識別できる。この第3面以下にも灰白色砂、黄灰色砂と炭や有機質の黒色粘土の互層がラミナ状にみられ、最下にも炭層の黒灰粘質土が堆積している。この第3～4面にかけての土層中にも土師皿、壺の集中した埋置



Fig.5 第2面遺構配置図 (1/100)

がみられる。(ph.4)

第4面は整地層最下の炭層以下に堆積した白色ないし、淡青灰色砂層である。粒子が粗くなり、漸次グライ化する。遺物は含まれなくなる。

上記のように、本調査において第1面以下は14世紀前半代の遺物を含む整地層とそれを掘りこむ遺構が検出され、下層には遡る古い時期の遺構面は検出されなかった。

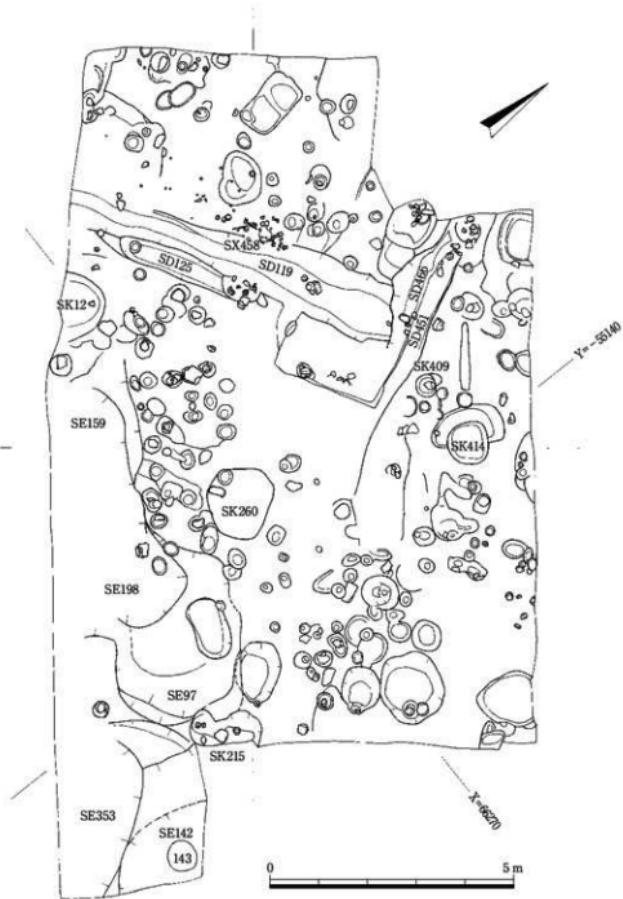


Fig.6 第3面遺構配置図（1/100）

4. 遺構と遺物

前項で既述したように遺構は主に第1面からの掘り込みで、以下は整地層と考えられる。しかし、第3面の黄灰色土で遺構のプランを明瞭に把握できたものが多い。第1面（標高1.9m）では14世紀前半から近世までの遺構、遺物を検出した。北側では柱穴に根石を据えた建物が多くみられ、この根石直上に銅銭を供えたものも多い。南側では井戸が集中し、南端では柱穴の分布から、掘立柱建物を切っているとみられる。

(1) 溝

SD119 調査区の北側で検出された。SD125に切られているが同方向に走行する。主軸方位は

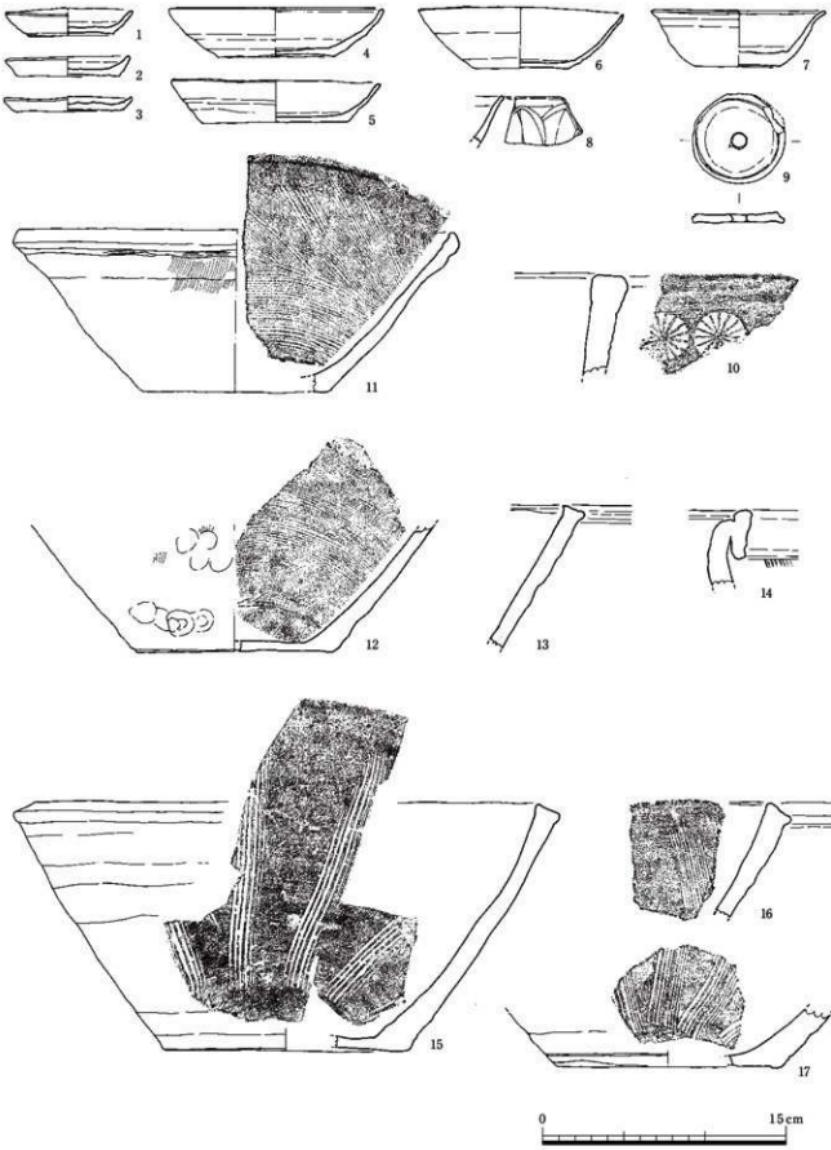


Fig.7 SD119 出土遺物実測図 (1/3)

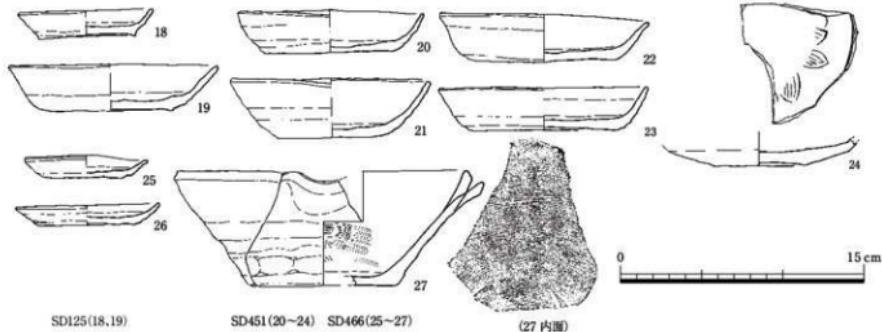


Fig.8 溝（SD）出土遺物実測図（1/3）

N-58°-E を示す。幅 1.7m、深さは 50cm を測り、下底は東側に若干深くなる。断面形は V 字形を呈し、埋土には礫を多く含む。(ph.2, 3) また、最下層には黒色粘土が厚さ 20 ~ 30cm 堆積している。

出土遺物(1 ~ 17) 土師皿の口径は 7.7 ~ 8.0cm である。1 は煤が付着し 4 は火熱で赤変している。6 は搬入系の土師器壊である。薄く外面にロクロ目が明瞭につく。内底中央がロクロ回しで尖り出る。薄いピンクがかる灰白色を呈す。13 は常滑鉢か。14 は常滑壺、15、17 は備前摺鉢。16 の陶器摺鉢は暗灰色を呈し、須恵質に近い。時期は 14 世紀前半とみられる。

SD125

上記の SD119 に平行するが南縁を切り込む。幅 60cm、深さ 55cm 前後を測る。溝内から 20 ~ 30cm 大の根石が 2 箇所検出され、布掘り状となっている。東側の延長は不明であるが、延長方向から根石が検出された。根石間は芯々で 150cm を測り、根石上には銅鏡が各 1 枚置かれていた。

出土遺物(18, 19) 遺物が少なく、明確な時期は不明であるが、SD119 と時期差はあまり無い。

SD451, SD466

調査区中央東側で検出された。SD451 と SD466 は重複し、SD119 に直行する。上面からは検出が難しく、下層でプランを検出した。しかし、延長は一部のみである。検出した幅は SD451, 466 合めて 70 ~ 110cm である。深さは SD451 が 30cm、SD466 が 35cm である。

出土遺物(20 ~ 27) 20 は口径 11.4cm と小さく、21 は底径が小さく器高が高い。22 は煤が付着し、火熱を受け赤変している。24 は白磁皿、27 は瓦質鉢である。14 世紀前半とみられる。

(2) 建物跡

第 1 面以下の整地層を切った柱穴が北側に検出された。南側は井戸に切られ消滅しているとみられる。柱穴には根石（礎板）を設置し、銅鏡を供えたものも多い。

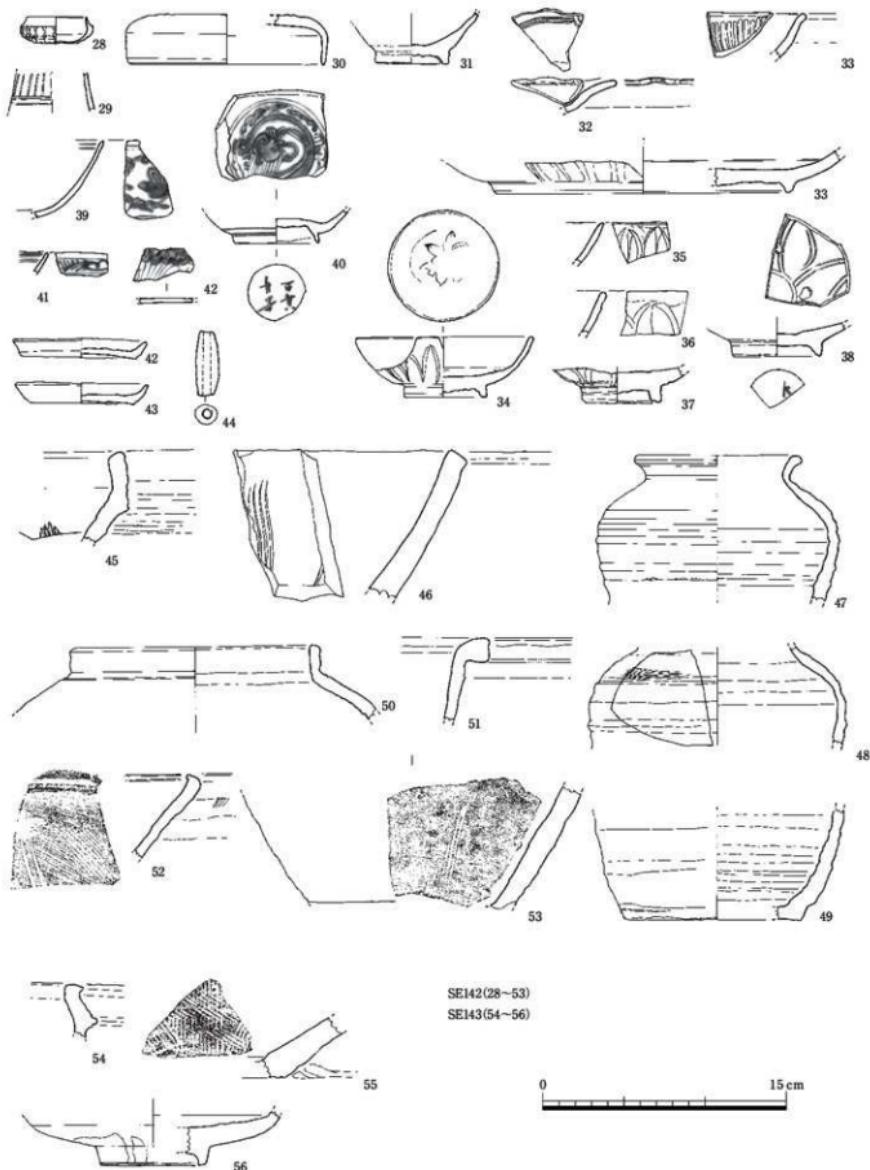
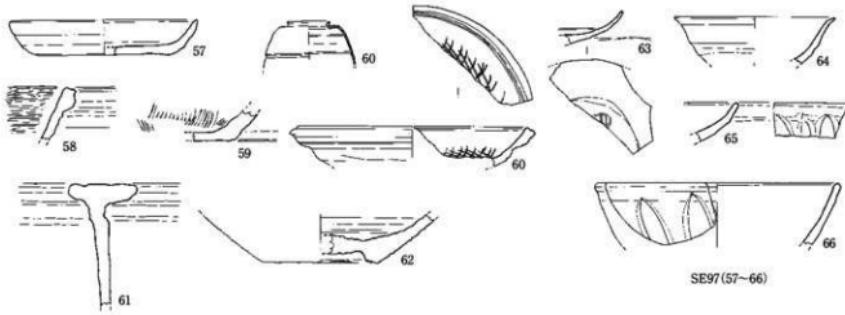
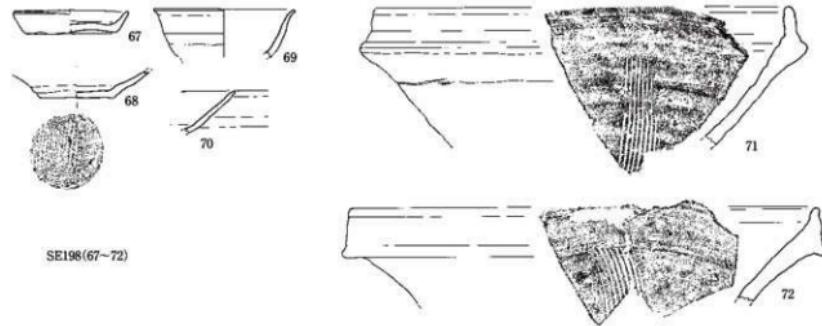


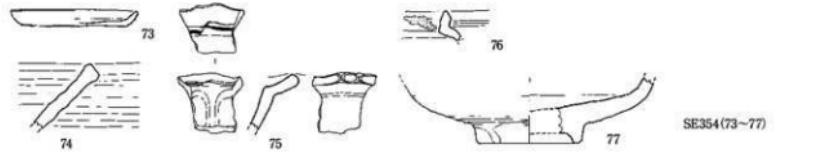
Fig.9 井戸(SE) 出土遺物実測図(1/3)



SE97(57~66)



SE198(67~72)



SE354(73~77)

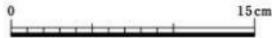


Fig.10 井戸(SE)出土遺物実測図2 (1/3)

SB01

SD119、125と同方向の梁行を示す。従って、棟方向はN-25°-Wである。桁行は5.80m以上を測り、柱穴7個が検出された。梁行は3.70m以上を測り、平行した柱筋が3本検出された。その中のSD125を切った柱穴の根石上には銅鏡が埋置されていた

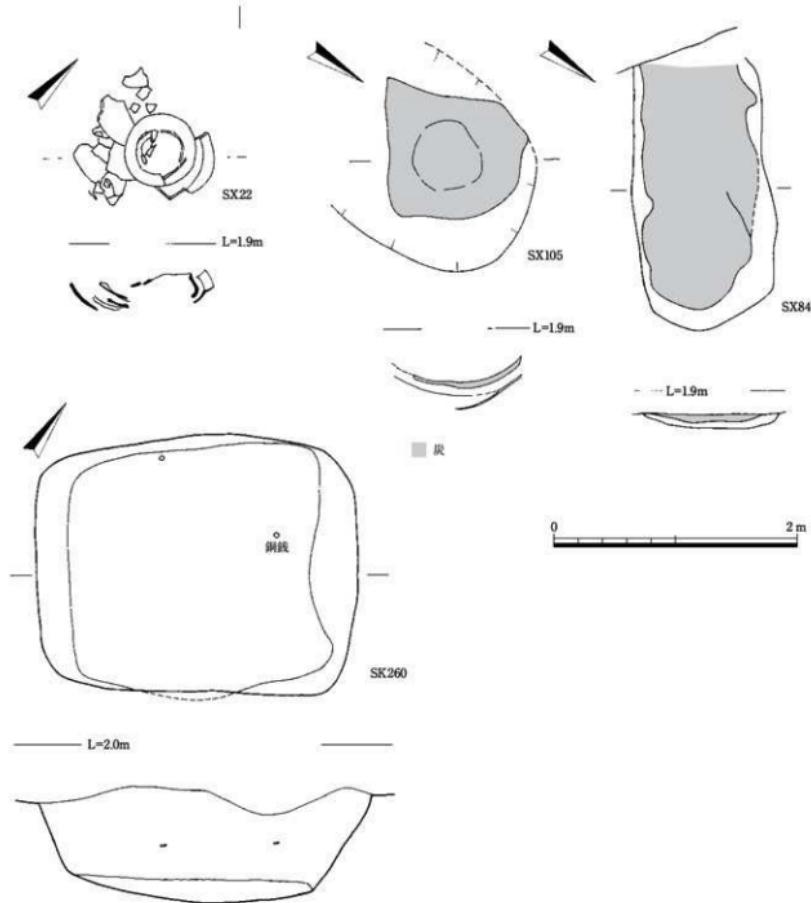


Fig.11 土壌等実測図 (1/40)

SB02

調査区の南西部で N-32°-W 方向の平行柱筋を検出した。南側は調査区外に延長するため不明であるが、北側を確定することができる。柱穴 7 個が柱筋に並び、6.40m 以上の規模が考えられる。柱穴は SE97、SE353 を切る。

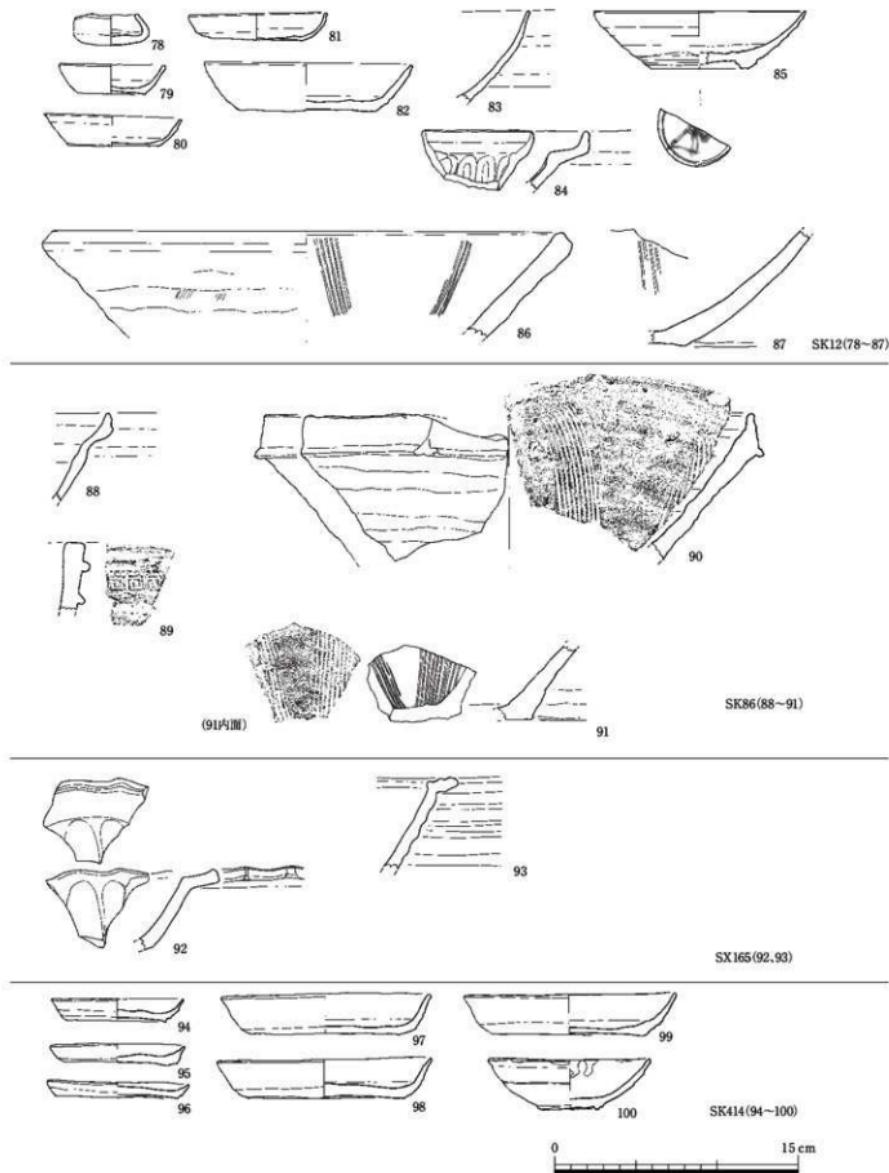


Fig.12 土壤（SK）出土遺物実測図（1/3）

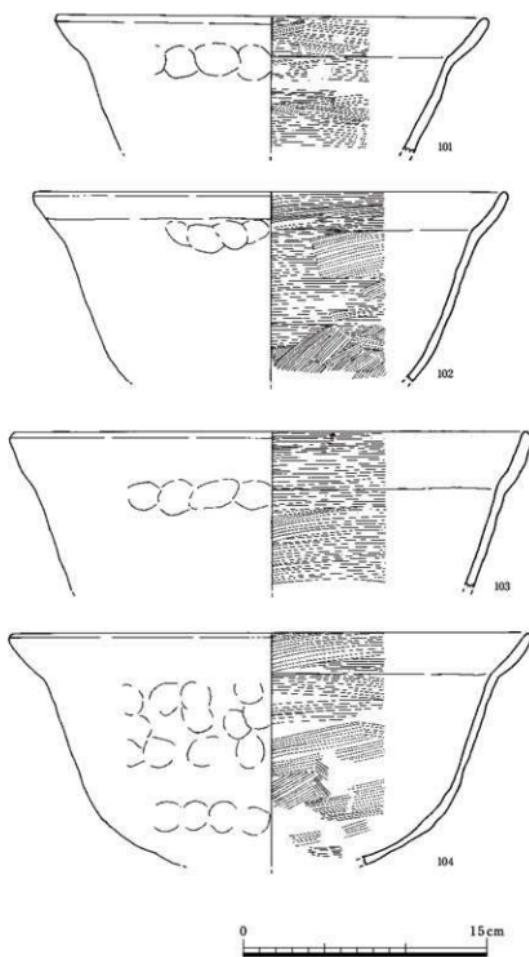


Fig.13 SX22 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (28 ~ 56) 備前摺鉢 46 から 16 世紀前半以降とみられる。

SE354

SE142 の掘り方の北側外縁に位置し、SE142 の掘方と重複する部分がある。

出土遺物 (73 ~ 77) 75 の青磁皿は 15 世紀代以降とみられる。

(3) 井戸

調査区北側で柱穴や土壌が多く検出されたに対し、南側では井戸群が集中して検出された。

SE97

調査区南西際で検出された。褐色砂の埋土で北側プランは明瞭に検出できたが、南側は SE142 に切られている。また、根石を設けた SB02 にも切られている。

出土遺物 (57 ~ 66) 60 の陶器肩入、61, 62 の陶器甕に新相がみられるが、14 世紀後半～15 世紀前半代に取まると考えられる。

SE198

西壁際で SE97 を切って検出された。第 2 面で西側の SE159 と切り合うことが判った。分布から柱穴より新しく、SX84 より降る。

出土遺物 (67 ~ 72) 備前摺鉢 58, 59 から 15 世紀後半以降とみられる。

SE142, 143

調査区南際で検出された。周辺に柱穴はほとんど検出されず、切っていると判断されることから時期も新期とみられる。SX22 周辺の西側は直線的なラインが検出され、方形に近いプランが考えられる。井筒は径 60cm の 143 である。143 の上部からは近世の遺物が出土した。

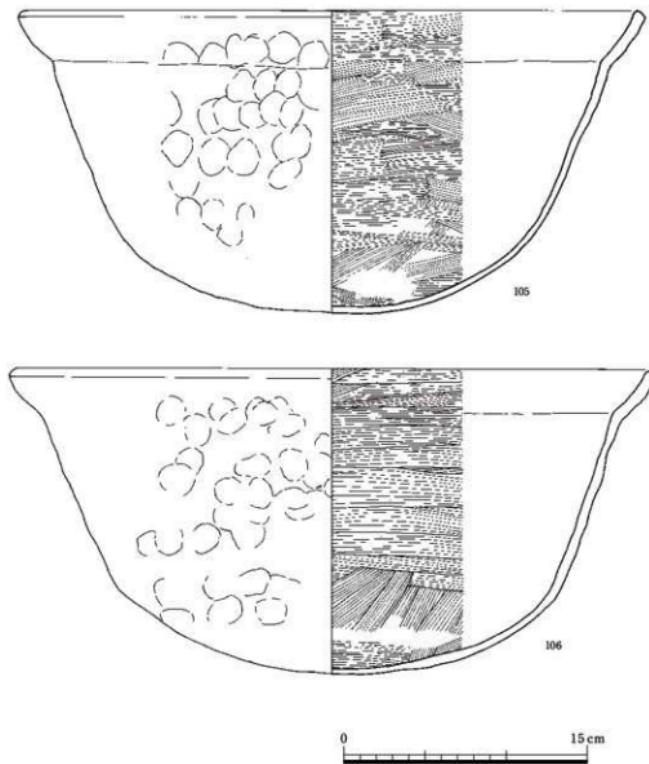


Fig.14 SX22 出土遺物実測図2 (1/3)

SE110

調査区の南西端で検出された。径 150cm の円形プランの中心部に径 80cm の褐色がかる灰白色の砂が堆積していた。井筒と思われるが完掘していない。この井筒からは近世の遺物が出土した。

(4) 土壙等

SK12

調査区北西際で検出された。径約 120cm の円形プランを呈し、深さ 28cm を測る。

出土遺物（78～87）土師器坏、皿には煤が付着している。83 の粉青沙器や 84 の青磁皿は 15 世紀後半以降か。

SX22

調査区南西部で検出された。土鍋 6 個体分が重なり、上部は壊された状況で出土した。最上部の土鍋は倒置し、底部が損壊していた。

出土遺物（101～106）出土した土鍋の器形はほぼ同じであるが、大きさからおよそ 3 種に分類できる。16 世紀以降とみられる。

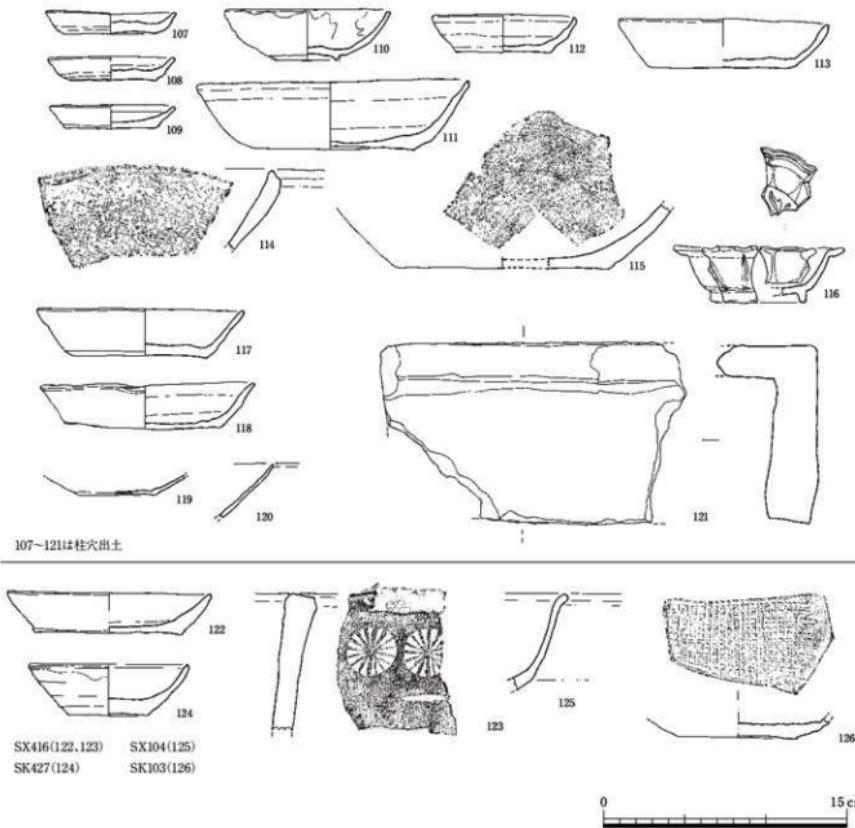


Fig.15 柱穴 (SP)、SX416 出土遺物実測図 (1/3)

SX84・86

調査区中央西際で SX86 を切った炭が隅丸長方形状に検出された。幅は 55cm、長さは調査区外に延長しているため不明であるが、90cm まで確認できた。炭層の下部には厚さ約 4cm の灰色粘土が堆積していた。炭は下記の 2 遺構でも検出された。

出土遺物 (88~91) は SX86 出土である。90 の備前摺鉢は 15 世紀後半まで遡る古相を示すが、88 の瓦質鍋、89 の瓦質火舎は 16 世紀まで遡る可能性がある。

SX165

調査区南西部で検出された炭層である。50 × 60cm の方形状プランを呈し、中央部が窪む。炭層は厚さ 4cm 程度、下部に約 5cm の灰色粘土が堆積していた。

出土遺物 (92, 93) 92、93 の青磁は 15 世紀以降であろう。

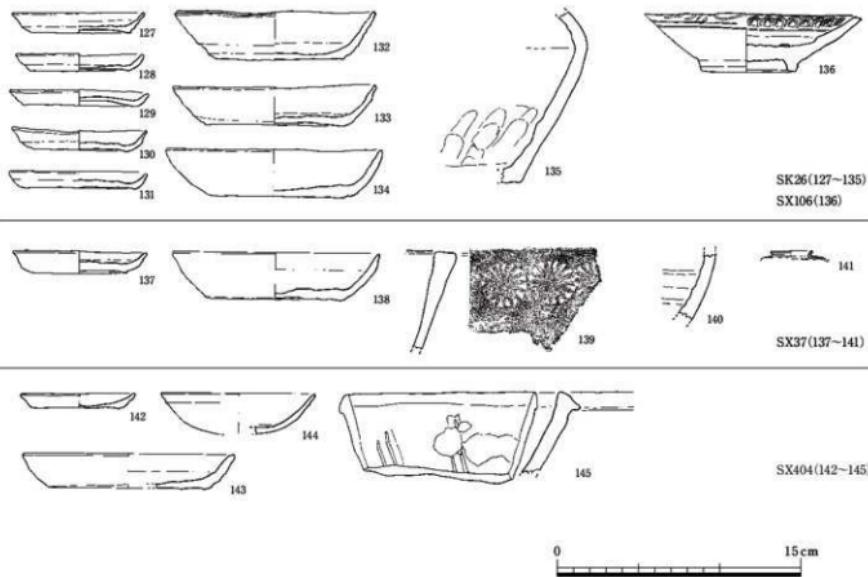


Fig.16 整地層出土遺物実測図 1 (1/3)

SK414

中央部東際近くの第2面で検出された。径80～88cmの隅丸方形に近いプランである。深さは30cmを測り、底面から獸骨のほか、土師器皿、壺が多く出土した。

出土遺物（94～100）98と吉備系土師器100には油煙がつく。14世紀代であろう。

SX215

調査区南寄りで検出された炭層である。最大幅35cm、長さ130cmの細い溝状に検出された。上部の一部に土師器壺完形、下部に土師皿等の完形が出土した。

出土遺物（155～172）土師皿の口径は7.6～8.5cm、壺は12.0～13.1cmを測る。172は直口の瓦質鉢（鍋）である。総じて14世紀前半以降であろう。

SX457

SX215に隣接した下層部に土師皿集積遺構SX457が検出された。

出土遺物（173～185）土師皿の口径は7.8～9.0cm、壺は12.7～13.6cmを測る。時期は上部SX215と変わらず、一連の遺構とみられる。

SX403

中央東際の整地面とみられ、炭が分布していた。

出土遺物（186～192）189には油煙が付着する。190は搬入系の土師器壺か。192は東播系の鉢である。総じて14世紀前半までには収まる。

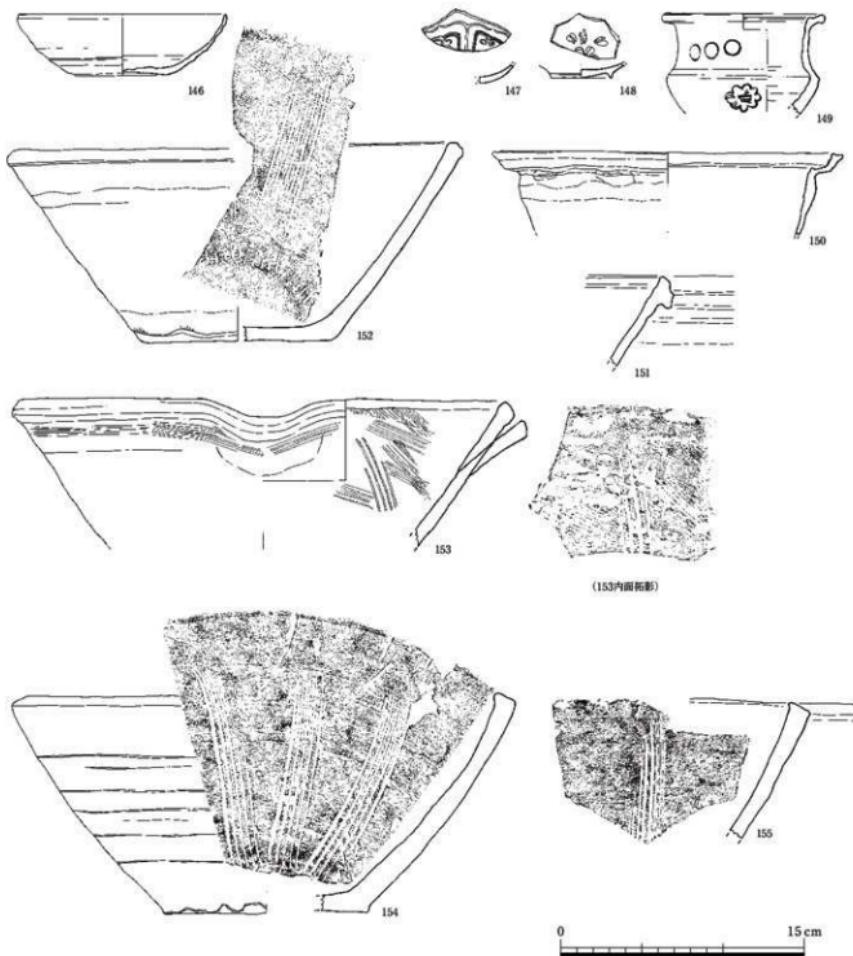


Fig.17 整地層出土遺物実測図2 (1/3)

SK260

中央部で検出された。長軸長135cm、短軸長102cmを測る歪な方形プランを呈す。深さは最深部で43cmを測る。上部に黄褐色から赤褐色の焼土、炭層、その下層に焼土、炭を含む灰層、さらにその下層に暗青灰色砂質土が堆積する。概ねレンズ状の堆積がみられる。

出土遺物は細片少量のため明確な時期は不明であるが、14～15世紀代であろう。

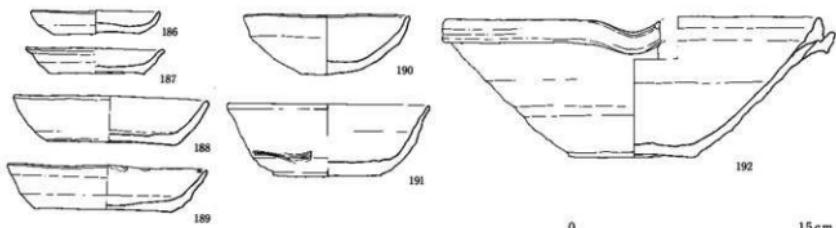
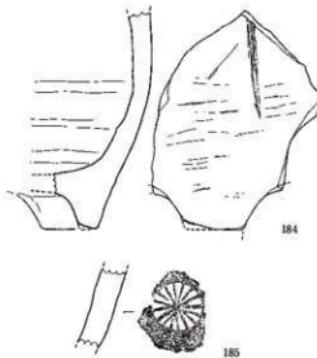
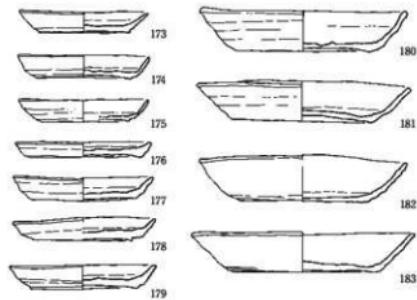
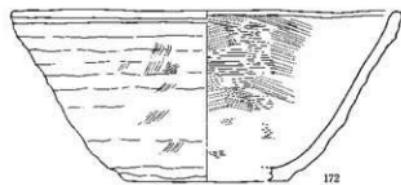
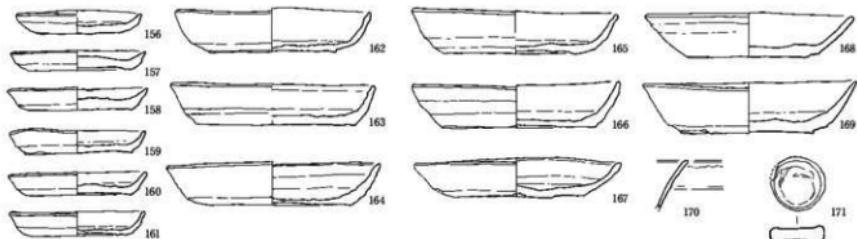


Fig.18 整地層出土遺物実測図 3 (1/3)

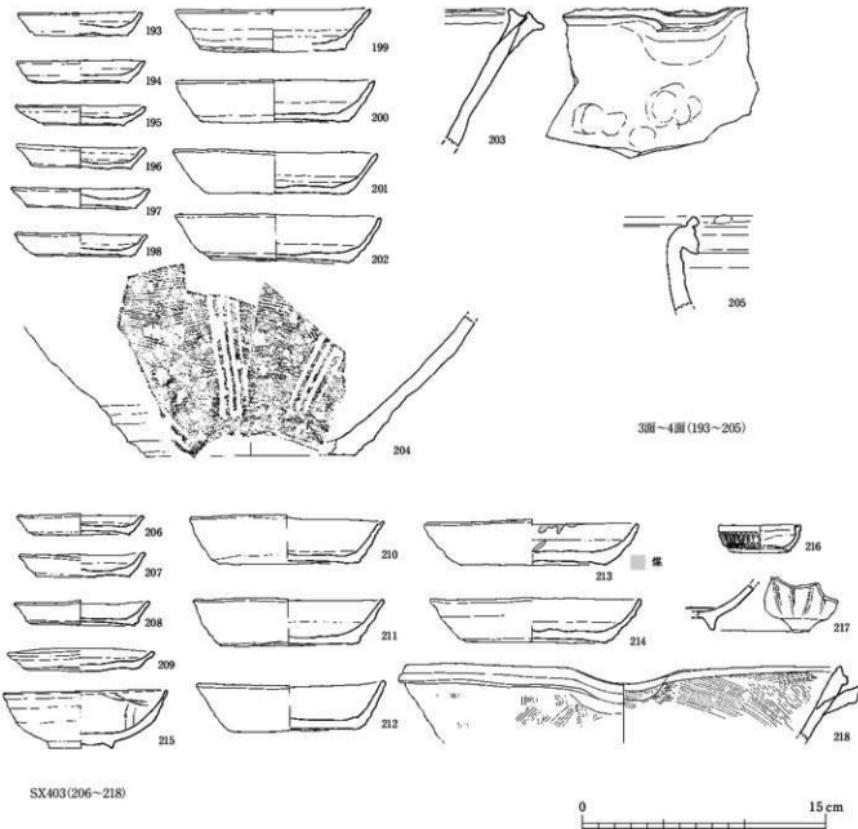


Fig.19 整地層出土遺物実測図4 (1/3)

(5) 柱穴

出土遺物 107～126 は柱穴出土遺物である。全体の時期から 14世紀前半以降から近世まで含むと考えられるが、分布や切り合い関係から 14世紀前半～15世紀代までが多いと思われる。

SX106

SX105 に切られた柱穴状遺構である。出土遺物 (136) の朝鮮青磁は 15世紀代とみられる。

SP404

中央東際の整地層 SX403 (前項) を切った SP404 が検出された。

出土遺物 (142～145) は SP404 出土である。備前摺鉢 145 は 14世紀代とみられる。

(6) 整地層、土器集中遺構

III-3項基本層序で既述したように、調査区中央部から北(西)側にかけて第1面以下細かい単位

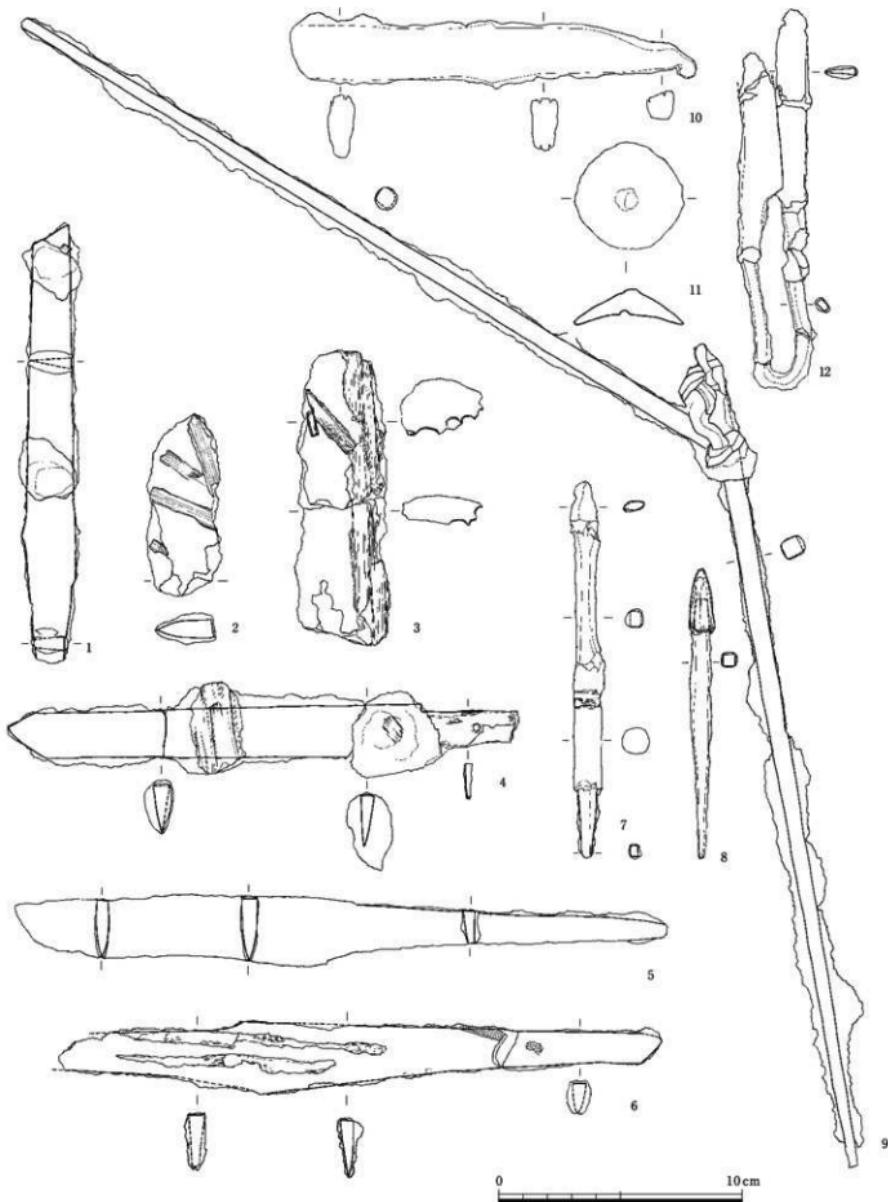


Fig.20 整地層出土遺物実測図 5 (1/2)

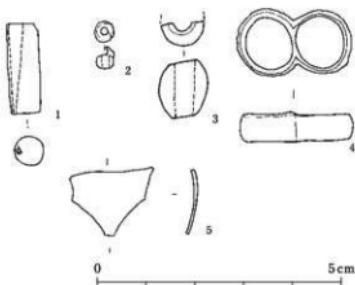


Fig21 整地層出土遺物実測図1 (1/1)

の整地層が堆積していた。概ね焼土、炭層を含む第1、2面、黄灰白色砂層の第3面以下の砂と有機質の黒色粘土がラミナ状に互層となって堆積した第3、4面に分かれる。なお、第4面以下はほとんど遺物を含まないグライ化した粗砂層となる。

この北西部のSD119周辺を中心とした整地層

から多くの土師皿、壺等の土器類の他、多量の銅錢と鉄器も出土した。便宜的に遺物が集中する部分に遺構番号を付し、取り上げたが、多くは一連の分布とみられ、時期的にも変わらない。遺構番号による位置と層位は以下のとおりである。

1. SD119の北側 1面上層（砂層）SX26、SX37 2面 SX229 SX303 3面 SX438 SX458
2. SD119 (125) 南 1面 SX174、231、2面 SX248、249 3～4面 SX336、340、342

調査区南東際では黄灰色の粘土層が土間状に縦しまって分布していた。その下層に炭層が帯状に堆積し、さらに下層には河川堆積の粗砂層がみられる。

SX26

SD119より北側の1、2面相当の整地層上層である。砂層、シルト層の互層がみられ土師皿、壺を主に遺物を多く含む。その砂層部分をSX26とした。SX37もほぼ同じである。

出土遺物(127～135) 土師皿の口径は79～85cmである。135は備前と思われる。総じて14世紀前半代か。

SX37

調査区北西部の上面遺構面である。灰色砂層が堆積し、下層の砂層と粘土の互層にも後述のように土師器壺、皿の集中がみられる。

出土遺物(137～141) 139は14世紀前半の奈良火鉢。141の陶器茶入は時期が他より新しいか。その他の1、2面出土遺物(146～155)

146は搬入系（京都系か）の土師器壺である。150は搬入系（近畿型か）の土鍋である。概ね14世紀前半に収まる時期と思われる。

整地層 340(下層)

SX125の南側整地層である。3～4面の下層部である。最下層には後述の整地層342が堆積する。

番号	出土遺構	種類
1	269	刀子
2	SX403 2区2面	刀
3	SX403 2区2面	刀
4	SX403	刀子
5	SX458 2区3面	刀子
6	342 整地層最下	刀子
7	342 整地層最下	鉄鎌
8	340 (3～4面整地層)	錐
9	SX458 2区3面	火箸
10	SP409 2面No2	蕨手状製品
11	280 周辺	傘状円盤
12	340 (3～4面整地層)	手鍔
1	上層砂層 37	碧玉製管玉
2	トレンチ 126	ガラス製小玉
3	SP447 2区2面	ガラス製纁玉
4	試掘坑	銅製連結リング
5	整地層 340	ガラス容器片

表1 鉄器等遺物一覧

銅銭名	初鋤年	数量	銅銭名	初鋤年	数量
開元通寶	621	11	元豐通寶	1078	7
太平通寶	977	4+(2)	元祐通寶	1093	3+(2)
至道元寶	995	1	紹聖元寶	1094	1
咸平元寶	999	4+(1)	元符通寶	1098	1+(1)
祥符元寶	1008	3	聖宋元寶	1101	3+(2)
天禧通寶	1018	2	大觀通寶	1107	1
天聖元寶	1023	2	政和通寶	1111	1+(1)
景祐元寶	1034	1	永樂通寶	1411	1
皇宋通寶	1039	8+(1)	開禧元寶		1
嘉祐元寶	1057	1+(2)	無文		17
治平元寶	1064	2	不明		61
熙寧元寶	1068	3	総数		151

表2 出土銅銭一覧

の出土であり、14世紀前半までに収まるとみられる。9は火箸とみられ、連結部に鎖状のものが巻き付いているが、形状は不明瞭である。10は先端が麻手状となっているが、厚みがあり、刃部はみられない。

(7) 出土石器、ガラス等 (Fig.21、表1)

(8) 銅銭 (表2)

総数で151枚の銅銭が出土した。その大半は調査区北西部の整地層中と柱穴内の根石上に置かれたものである。

IV おわりに

1. 博多遺跡群の中世における埋め立てについて

今回の調査では埋没した旧河道を14世紀前半に埋め立て整地を行った状況が検出された。細かい互層の堆積が検出され、その堆積中に土師器の皿、壺のほか銅銭が多く出土した。地鎮のような祭祀を伴う可能性がある。その後、周辺では89次、96次において、16世紀後半代の石積護岸跡が検出されている。(Fig.1) 大規模な土地の改変が行われるのは、労力を集約できるようになるこの時期から17世紀初頭にかけてとみられる。

2. 14世紀前半の遺物について

調査では14世紀前半の遺物が多く出土した。輸入陶磁器は前代に比べ、急激に減少する一方、国内の奈良火鉢、備前擅鉢、常滑壺、瀬戸の卸皿、吉備系、京都系の壺などが多くみられる。

出土遺物 (193～205) 土師皿の口径は7.7～8.1cm、壺は12.0～12.5cmを測る。205の常滑壺は中野編年の6bに該当し、14世紀前後とみられる。他の出土遺物も14世紀前半代までに収まるであろう。

整地層 342 (最下)

SD125南側の整地土最下層である。炭、焼土が混じる黒灰粘土である。

出土遺物 (206～218) 土師皿の口径は7.6～9.6cm、壺は11.7～13.2cmを測る。14世紀前半代に収まる。

(6) 出土鉄器

掲載した鉄器すべてが整地層から

種別 番号	植物 番号	通称名	種類	特徴	種別 番号	植物 番号	通称名	種類	特徴
7	6	SD119	土師器環	縫入系。灰白色。薄手。	12	83	SK12	朝解 青組織	粉青沙器。内面に白斑を引く。
7	7	SD119	白磁皿	瓦質。口ハゲ。外底に輪を引き伸ばす。	12	84	SK12	青磁盤	薄い黄色。胎は淡褐色。水漬は太い黒線。
7	8	SD119	土製結跡車	外周に波がつく。	12	85	SK12	青磁盤	内底露胎。内底の輪に赤色化した部分に目跡あり。外底に墨書き。花押か。
7	9	SD119	青磁輪	蓮弁文。	12	86	SK12	土師質 摺拂	87と同一側体。
7	10	SD119	瓦質火舎	外面、内面口縁付迄ミガキ。車輪文スタンプ。	12	87	SK12	土師質 摺拂	86と同一側体。
7	11	SD119	瓦質鉢	前面部を追ぐて赤褐色を呈す。	12	88	SX86	瓦質 瓢	内外混黒色。
7	12	SD119	瓦質鉢	外面部にヶ後ナメ。内面黒色。模ハケ	12	89	SX86	瓦質 火鉢	内外混黒色。
7	13	SD119	陶器座	常滑か。赤褐色。口縁から内面施釉。	12	90	SX86	衛前 摺拂	開陽哲吉期
7	14	SD119	陶器座	常滑丁明。	12	91	SX86	衛前 摺拂	
7	15	SD119	陶器摺拂	備前。赤褐色。施釉なし。摺目 6 本単位。	12	92	SX165	青磁 罂	淡オリーブ色
7	16	SD119	陶器摺拂	暗灰色。須状質に近い。施釉なし。摺目 11 本単位。	12	93	SX165	青磁 罂	黄緑色。劣化し白濁が多い。外面、口縁上面のヨコナデ痕が明顯。
7	17	SD119	陶器摺拂	備前か。暗褐色。摺目 7 本単位	12	100	SK414	土器環 环	古備系。油付付着。下部押し出し。
8	24	SD451	白磁瓶	内底花に墨書き。外底露胎。	13	101	SX22	土鍋	外面部指揮。内面細かいハケメ。外面塗付着。
8	27	SD466	瓦質鉢	内面混黒色。	13	102	SX22	土鍋	外面部指揮。内面細かいハケメ。外面塗付着。
9	28	SE142	青白磁合子	青白磁合子	13	103	SX22	土鍋	外面部指揮。内面細かいハケメ。外面塗付着。
9	29	SE142	絹地陶器	内面裏に込み込みで施釉と模様を造りだす。内面露胎。	13	104	SX22	土鍋	外面部指揮。内面細かいハケメ。外面塗付着。
9	30	SE142	白磁瓶	灰。通音部は全底施釉。	13	105	SX22	土鍋	内底に灰化物付着。熟耗。
9	31	SE142	青磁輪	朝鮮。輪部に妙野花が 4 輪付く。淡緑灰色。	14	106	SX22	土鍋	内底灰耗。
9	32	SE142	青磁輪	淡緑灰色。輪部に妙野花を描く。	15	110	SP168	土器部小輪	内底凸輪。油煙が付く。
9	33	SE142	青磁輪	内面に細かい花弁を刻む。口縁端部外反。	15	114	SP199	瓦質 鉢	115と同一側体。外面部クリーテー状に発泡劣化。
9	33	SE142	青磁大皿	高台内側の輪を輪状に描き取る。外縁運びを顧る。	15	115	SP199	瓦質 鉢	114と同一側体。内底に運び付着。
9	34	SE142	青磁小皿	見込みに印刷。高台内側の輪を輪状に描き取る。	15	116	SP208	青磁小皿	内底にスタンプ文。口縁部。内面にも運びを表現。
9	35	SE142	青磁輪	輪端走。	15	119	SP365	土師器環	入系。外底に灰化物付着。120と同一側体。
9	36	SE142	青磁輪	輪端走。	15	120	SP365	土師器環	入系。明灰褐色。119と同一側体。
9	37	SE142	青磁輪	見込みと高台昇付から外底部は露胎。	15	121	SP401	瓦	窓戸瓦か。
9	38	SE142	青磁輪	花弁 2 重瓣に白土を嵌入。高台昇付から外底部露胎。外底に墨書き。	15	123	SX416	瓦質 鉢	菊花文スタンプ。
9	39	SE142	青花輪	内面口縁部に 2 重瓣。	15	124	SK427	白磁 环	完形。外頭口縁部より下部は露胎。口部に保付着。
9	40	SE142	青花輪	外底部に「富貴佳器」。	15	125	SX104	青磁輪	進存する範囲は施釉。
9	41	SE142	青花輪	内面口縁部に 2 重瓣。	15	126	SX103	陶器 錦皿	進存する範囲は露胎。
9	42	SE142	青花輪	外面部露胎。	16	135	SX26	陶器器	備前。
9	44	SE142	土製結跡車	長さ 39cm。最大幅 15cm。	16	136	SX106	朝解 青組織	内底 3 本筋口目跡。高台が焼成時に崩れている。高台内側は工具で押しきれいに成形。
9	45	SE142	陶器摺拂	備前 V 周。	16	137	SX37	土器環 环	完形。單形。單付着。外底板目なし。
9	46	SE142	陶器摺拂	輪軸上の輪に淡緑色の輪が網状に重す。	16	138	SX37	土器環 壁	完形。内底ナメ。外底板目あり。
9	47	SE142	陶器座	備前座。	16	139	SX37	瓦質 大鉢	余良火鉢か。体部が輪花状。
9	48	SE142	陶器座	備前座か。窑と同一側体。	16	140	SX37	陶器 壁	外面部施釉。外面の輪は白色。内面は乳灰色。
9	49	SE142	陶器座	輪端走。	16	141	SX37	陶器 罂	黒輪と割離した部分が現状。
9	50	SE142	瓦質釜	内外混黒色。	16	144	SX404	土器部 环	1 口。吉備系。火熱を受ける青灰 - 赤褐色。
9	51	SE143	青磁輪	16	145	SX404	陶器 罂	輪戸瓦か。	
9	52	SE142	瓦質摺拂	内外混黒色。	17	146	2, 3 画 静屋	土器部 环	入系。白灰色。薄い。外底に赤り直し痕を残す。
9	53	SE142	瓦質摺拂	内面のみ焼れて黑色。	17	147	1 ~ 3 画	白磁	型押し。
9	54	SE143	陶器摺拂	備前か。内面施釉。	17	148	1 ~ 3 画	青白磁	
9	55	SE143	陶器輪	跡口輪か。紅(灰)を呈す。	17	149	1 ~ 3 画	器蓋 小皿	黄緑釉。円文、花文スタンプ。
9	56	SE143	青磁座	77 と同一側体。入系。灰白色。	17	150	西脇清掃	土鍋	近似型か。外面付着。外面部指揮さえ。
10	58	SE97	上部	外面黑色付着。	17	151	1 ~ 3 画	頬質鉢	東播系。第 3 期第 2 段階
10	59	SE97	瓦質摺拂	灰白色。軟質。	17	152	1 ~ 3 画	瓦質 鉢	
10	60	SE97	陶器羽扇	外面部暗褐色の施釉。	17	153	1 ~ 3 画	瓦質 鉢	
10	60	SE97	土器羽扇	施釉無し。灰白色。土師質に近い。	17	154	1 面上輪	陶器 摺拂	備前開窓直筋。体部わざに内溝。
10	61	SE97	陶器葉	緑褐色。全面施釉。	17	155	1 ~ 3 画	陶器 摺拂	備前。外面部赤褐色。
10	62	SE97	陶器葉	49 と同一側体。全面施釉。高台に粘土跡み跡。	17	156	1 口	瓦質 瓢	口ハゲ。
10	63	SE97	青磁瓶	青磁。外面に墨書き。	18	171	SX215	土器蓋 内袋	外底厚い。
10	64	SE97	白磁小皿	外面部全体の下底露胎。	18	172	SX215	瓦質 鉢	口縁部肥厚。外面部ハケ後ヨコナデ。内面ハケメ。
10	65	SE97	青磁輪	龍泉窯青磁青磁輪。	18	184	SX457	瓦質 大鉢	余良火鉢。
10	66	SE97	青磁輪	龍泉窯青磁青磁輪。	18	185	SX457	瓦質 大鉢	余良火鉢 336 と同一側体。
10	68	SE198	土師胚	70 と同一側体。入系。灰白色。	18	186	SX403	土器頭	下刷。完形。外底板目なし。
10	69	SE198	白磁小皿	外部部付帯は露胎。釉は乳白色。	18	187	SX403	土器頭	下刷。外底板目なし。
10	70	SE198	土師器環	68 と同一側体。入系。薄手。灰白色。	18	188	SX403	土器部 环	下刷粘付。完形。外底板目なし。
10	71	SE198	陶器摺拂	備前瓦 周。	18	189	SX403	土器部 环	下刷粘付。完形。油煙付着。
10	72	SE198	陶器摺拂	備前瓦 周。	18	190	SX403	土器部 环	下刷 ほは式。鈍入系。内面丁寧なナデ(ミギカ)。油煙付着。
10	74	SE354	頬質葉	内外面クロコによるヨコナデ痕が明顯。	18	191	SX403	土器部 环	
10	75	SE354	口縁輪	口縁輪。口縁内面にヘラの複繩(草花)文。	18	192	SX403	頬質葉	上層秒綱 東播系。第 3 期第 1 ~ 2 段階
10	76	SE354	白磁葉	77 と同一側体。	19	203	360 整地輪	陶器 鉢	3 ~ 4 頭秒綱 常滑。中野(6b ~ 7)
10	77	SE354	白磁葉	56 と同一側体。高台から外底は露胎。	19	204	340 整地輪	瓦質 摺拂	3 ~ 4 頭秒綱 黑灰色。軟質。
10	78	SK12	土師器 环	外面に墨書き。	19	205	340 整地輪	陶器 要	3 ~ 4 頭秒綱 常滑。中野(6b ~ 7)
10	79	SK12	土師器	外底に墨書きあり。内面露胎付着。	19	215	342 栃子輪	土師器輪	吉備系。外面部指揮させ。
10	80	SK12	土師器	内底ナメ。外底板目なし。脚摩が薄い。	19	216	342 栃子輪	青白組合子	
10	81	SK12	土師器	外底にハケメ。内面露胎付着。厚摩が薄い。	19	217	342 栃子輪	青磁輪	龍泉窯系。外面部運び文。
10	82	SK12	土師器環	焼付着。外底板目なし。	19	218	342 栃子輪	頬質葉	灰色。内面ハケメが残る。



ph.1 調査区全景（第1面 南東から）



ph.2 SD119 検出状況（東から）



ph.3 SD119 土層（東から）



ph.4 SX342（整地層最下）土層と遺物出土状況



ph.4 調査区南東隅土層（西から）



ph.5 SX37 遺物出土状況（東から）



ph.6 SX22 検出状況（南から）



ph.7 SX260 検出状況（北西から）

-報告書抄録-

ふりがな	はかた 158							
書名	博多 158							
副書名	博多遺跡群第202次調査報告							
シリーズ名	福岡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1338集							
編著者名	荒牧宏行							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2018年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
博多遺跡群	福岡県福岡市博多区下川端町158番	40132	020121	33° 35' 46"	130° 24' 21"	20141015 20141229	168	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
博多遺跡群	町屋	室町～近世	井戸、溝、掘立柱建物、土壙	陶器、土師器				
要約	博多遺跡群北西部の括れた入海近くに位置する。下層の河川堆積上に14世紀前半に埋め立て、整地を行った堆積が観察された。整地層中には土師皿、壺が多く出土し、銅錢も多く出土した。地鎮等の祭祀に伴う可能性がある。 整地層を切った根石を据えた柱穴も多く検出され、柱筋も確認することができた。また、根石上に銅錢を埋置したものも多い。井戸も3基以上検出され、16世紀代までの存続が認められた。近辺の調査とあわせ、中世から近世にかけての埋め立て、開発の推移をみることができる。遺物では14世紀前半で京都系、吉備系の土師器壺、奈良火鉢、瀬戸鉢皿、常滑、備前の陶器壺、摺鉢等が国内貿易により活発に流入していることが伺える。							

博多 158

- 博多遺跡群第202次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1338集

2018年3月26日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 西菱

福岡市早良区次郎丸1-7-1